『医心方』における口腔疾患の分類と文献引用について

戸出一郎

『医心方』巻第四には髪・頭・面諸病が載り、巻第五には耳・目・鼻・唇・口・吐血・舌・喉咽等、いわゆる五官の疾病が記載されている。口腔領域に関する部分は、治緊唇生瘡方第三十八から治咽中如肉嚶方第七十四までの37項目である。

このうち第三十八～四十二は口唇の疾病で、第四十三・四十四は口舌の病、第四十五～四十八は口を経て出血する病、第四十九～五十一は口腔粘膜の炎症、第五十二は口臭、第五十三は下顎骨脱臼、第五十四・五十五は舌の病、第五十六は口蓋垂の病、第五十七～六十九は歯の病、第七十～七十四は喉咽の病である。

巻第四・第五ともに、疾病は器官ごとにまとめて、上から下へ、外から中へと順序を追って記述されている。巻第五の第四十五～四十八の九竅四支からの出血・欧血・吐血・唾血は口を経て出血する内臓疾患であって口腔疾患とは言い難く、分類上はむしろ臓腑に配すべき疾患であろう。『諸病源候論』では巻二十七血病諸候に配されている。『千金方』『外台秘要方』でもこれらの疾患は口腔諸病の中には見られない。

『医心方』で吐・欧・唾血がここに入れられた理由は、恐らく血液が口から出たという点にもとづいているのであろう。

口腔疾患の分類は、大筋では『諸病源候論』や『外台秘要方』にならっているが、それは単なる模倣ではなく、病名や項目の分類・序列に工夫がみられ、かつ、むだがなく、実用に役立つよう配慮されている。例えば『諸病源候論』の牙歯病諸候のうち、牙歯痛候・牙痛候・歯痛候は本質的には同じものであるが、『医心方』では治牙歯痛方六十六で一つにまとめられている。また『諸病源候論』の牙蟲候・歯蟲候・歯齲候・牙歯歴蠹候はとりあげられていない。

康頼は疾病の分類にあたって独自の考えを貫いている

が、文献の引用についても同様である。

引用文献の範囲は『諸病源候論』・方書・本草・食経・養生にわたる。文献数は29で、引用回数は総計236におよんでいる。また引用文献すべてに出典を明記して、医説や治方の根拠を明らかにしている。

各項目の冒頭には『諸病源候論』の病理論が引用されているが、すべての項目に引用しているのではなく11項目には引用がない。そのうち治口吻瘡方第五十と治張口不合方第五十三は『諸病源候論』に同様の項目があるにもかかわらず引用されていない。その他の9項目は『諸病源候論』には該当するものがない。

『諸病源候論』から引用される場合、その全文を引用されることは稀で、大部分は一部分の引用にとどめられている。すべての項目に引用されているのは、経絡臓象説にもとづく病理論である。省略された部分は経絡の流注・脉診・養生方中の導引方である。

また、治風歯痛方第五十七と治牙歯痛方第六十六では『諸病源候論』の「若蟲食歯而痛者歯根有孔蟲在其間此則針灸不瘥伝薬蟲死痛乃止」を省略している。また同書の牙歯蟲候・牙蟲候・歯蟲候・歯齲候・牙歯歴蟲候は全くとりあげていない。

蟲が歯を食して歯に孔をあけるという病理論は『内経』にはなく『諸病源候論』に初見するものであるが、康頼はこの病理論を排除しているように思われる。

康頼は文献引用にあたっては現実的・理性的であった。それゆえ方書としては無意味な経絡の流注や脉診や導引方の呪術的部分を排したのであろう。しかし『医心方』全体としては呪術的部分はかなり残されている。それは咒禁生が制度化されていた有神論の世界にあっては当然のことである。治齲歯痛方第五十八、葛氏方の又方にも呪術的処方が存在する。

しかし、口腔疾患の分類と、各項目における『諸病源候論』引用の傾向は現実的で、節略は『内経』の尊重の上に行われているように思われる。

引用された文献は『千金方』と『葛氏方』がきわだって多い。『千金方』は所載処方数が多いこともあるが、当時中日両国で最も重要な文献となっていたのであろう。『葛氏方』は単方が多く、簡便かつ実用的であったため好んで

引用されたのであろう。口腔疾患におけるこれらの傾向は『医心方』全体の傾向と一致するものである。

（鶴見大学歯学部）

『小品方』の処方について

広田　曄子

『小品方』は紀元五世紀頃、陳延之によって著された処方集である。『小品方』から『外台秘要方』および『千金方』に引用された処方について分析を試みた。

㈠『小品方』から『外台秘要方』および『医心方』に引用された処方の構成生薬の数

灸や呪術などを除いた生薬による治療で、『小品方』から『外台秘要方』および『医心方』に引用された処方数は全部で五一二処方であった。内服は三八二処方、外用その他は一三〇処方であった。内服では煎剤が一九二処方であるのに対し、丸散剤は一九〇処方とほぼ同数である。

また、単方は五一二処方中の二七三処方であり、半数以上である。このように単方が多く引用されるのは、唐以前の医書から単方が多く引用される傾向と一致する。